

飛鳥藤原宮跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1973年度の飛鳥藤原宮跡の調査としては、藤原宮跡で南西官衙地区（10次）と内裏西辺部分（11次）とを行い、その他小墾田宮跡、坂田寺跡、川原寺跡、大官大寺跡、藤原京西南地区、奥山久米寺跡、推定山田道跡等で行った。また奈良県教育委員会との共同調査として紀寺跡を発掘した。以上の調査地点とその期間・面積については第1表の通りである。

藤原宮跡第10次の調査 藤原宮跡第10次調査は、橿原市営四分団地造成に先立って実施したもので、鶯栖神社の東80m、藤原宮の西辺にあたる。検出した主な遺構には、掘立柱建物6、柵2、溝4、土塙6、井戸1などがある。

発掘区西端を南北にはしる柵SA 258は、宮城南門中軸線の西464mの位置にあり、藤原宮の西を限る大垣にあたる。28間分（74.5m）を検出し、さらに南北へつづく。柱間は2.66m等間に割りつけている。各柱穴はすべて西側に柱抜取穴がある。柱列の方向は真南北に通っている。SA 258の東11.8mの位置にはこれと平行する南北溝SD 1400がある。SD 1400は南から北へ流れ、長さ77.4mにわたって検出したが、さらに南北につづいている。幅約2m、深さ0.6mを測る。溝埋土からは、完形の軒瓦、丸・平瓦が大量に出土した。SD1400は、宮西辺の内濠という性格を有するものと思われる。

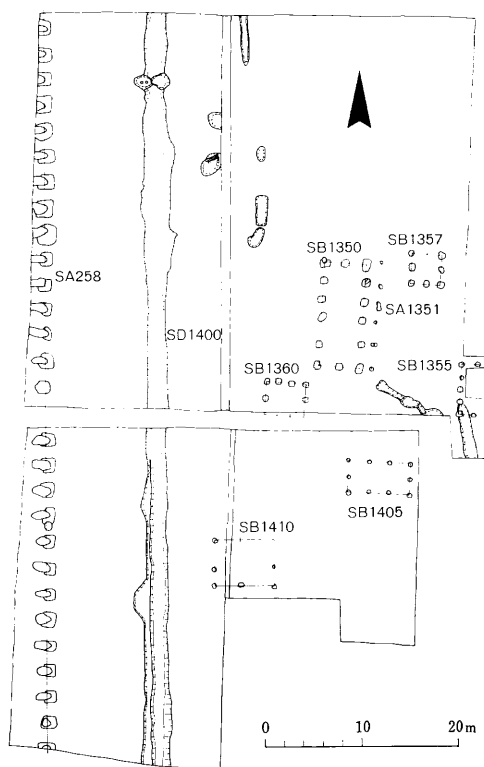
掘立柱建物6棟は、いずれもSD1400の東側に位置している。SB1350は、5×2間の南北棟建物で、桁行方向の柱間が、南2間は広く、北3間は狭くなっている。SB1350の東1.5mの位置に、建物と柱通りを揃えた南北SA1351が柵ある。これはSB1350に付属する目かくし堀のような性格をもつものであろう。SB1357は、SB1350の東にある2×2間の小建物である。SB1355は4×1間以上の南北棟で、東半は発掘区外につづく。この他、SB1350の南に

	調 査 地 区	調 査 期 間	調査面積	主な検出遺構
6AJL	藤原宮跡第10次・南西官衙地区	1973. 10. 1 ~ 1974.3	10.0a	柵, 溝, 建物
6AJF	藤原宮跡第11次・内裏西辺地区	1974. 1.28 ~ 2.30	2.5	柵, 溝, 建物
5AOH	小墾田宮推定地 第2次	1973. 5. 1 ~ 10.31	23.0	柵, 溝, 建物
6BKH	川原寺	1973. 9. 6 ~ 12.15	20.0	東大門, 東南院
6AMB	大官大寺	1973. 11.13 ~ 12.22	6.4	掘立柱穴
5BST	坂田寺 第2次	1974. 1.16 ~ 4.30	5.7	井戸, 溝
5BIS	藤原京西南地区	1973. 10. 3 ~ 11.13	4.6	溝
5BOQ	奥山久米寺	1973.7.5~1974. 2.16	2.8	
6BKI	紀寺	1973. 5. 8 ~ 1974.2	12.0	金堂, 講堂
5YLK	山田道推定地	1974. 3.20 ~ 4.8	3.0	溝

第1表 1973年度発掘調査状況

飛鳥藤原宮跡の発掘調査

は3棟の掘立柱建物SB1360・1405・1410がある。SB1360は、SB1350のすぐ南に位置する3×2間の東西棟である。さらに南に、同じく3×2間の東西棟建物SB1410がある。SB1405は南西に少し隔てて建つ2×2間の小建物である。SB1405・1410の両者は、他に比して柱掘形がやや小さい。これらの建物の軸線方向は、いずれも、真南北に対して北で東に約4°の振れをもっている。土壌は、発掘区中央北寄りに集中しており、古墳時代初期のものSK1372、7世紀中頃のものSK1365・1366・1368、藤原宮期のものSK1380・1399がある。SK1366が長方形平面(3×1.2m)を呈する他はみな不整な楕円形のプランをもつ。藤原宮期の土壌SK1380からは軛が出土している。現在までのところ最古の実例であろう。これらの土壌が集中する地区には、他に6世紀代の井戸SE1382がある。この他に、小規模な溝状遺構としてSD1352・1354・1364がある。



第1図 藤原宮跡第10次調査遺構図

南北溝SD1400から4点の木簡が出土した。いずれも保存状態が悪くいが、判読できるものは以下の通りである。

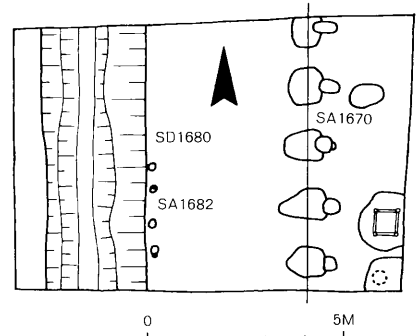
- ① 六□□……
- ② …□母□□□□……
- ③ …□一斗五□(升_カ)……

なお、下層遺構として弥生時代(I~V様式)の井戸、土壌、溝、小ピット等、多数の遺構を検出し、土器、木器、石器等多量の遺物が出土している。

藤原宮跡第11次の調査 第11次調査は資材置場の建設に伴う事前調査として行ったものである。調査地は大極殿の西150mの所にあり、先に内裏東外郭を限る柵列を検出した第4次調査地と大極殿をはさんで西側に対称する位置にあたる。

検出した主な遺構には、藤原宮期の柵1、溝1があり、他に中世の小溝、近世の井戸などがある。SA1670は、内裏外郭の西を限る南北柵であり、4間分を検出した。柱間は2.95m等間に割りつける。柱掘形は一辺1.5m前後であり、いずれも柱抜取穴をもつ。また、この柵列の東側には、これと重複する小柱列があり、柵の内側に添柱が付属していた可能性を示してい

る。S A1670と第4次調査で検出した東外郭の柵 S A865との距離は305mである。これによって内裏外郭の東西幅を確定することができた。S A1670の西12mには南北溝 S D1680がある。S D1680は、幅約5m、深さ0.5mを測る。溝内堆積土中の最下部より5点の木簡が出土した S D1680は、第4次調査で検出した S D105に対応するものとみられるが、内裏外郭の柵との距離が、東外郭では8mとなっており、東西で様相を異にしていることが明らかになった。S A1670と S D1680との間、8.5mの地区には顕著な遺構は認められず、S D1680に沿って走る柵状の小柱穴列 S A1682を3間分検出したのみである。



第2図 藤原宮跡第11次調査遺構図

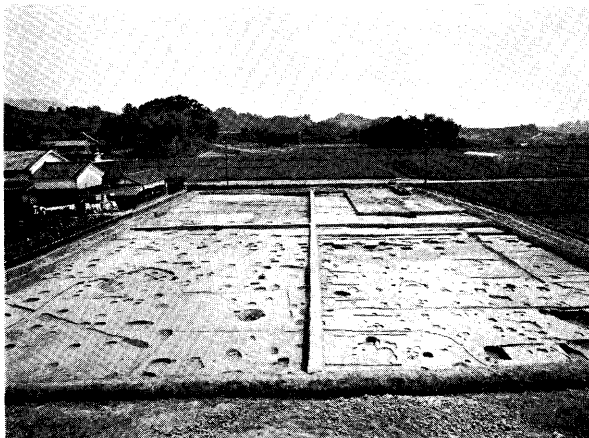
S D1680から出土した木簡のうち、判読可能なものは次の一点だけである。

(表) □田郡長岡里道守奈加麻呂

(裏) 五斗八升

この他、73年度に行った藤原宮跡の調査として、第8・9次の調査がある。これらの調査は、鴨公小学校建設予定地で行ったもので、調査の結果、建物、柵、井戸、溝、道路等の遺構を検出した。これについては既に年報73に概要を報告しているので参照されたい。

小墾田宮推定地の第2次調査 調査地は、古宮土壇の西南約80m、推定「山田道」の北側で、昭和45年度に実施した第1次調査地の西方にあたる。この地域の旧地形は、南から張り出した低平な台地がゆるやかに起伏しながら西北方へ傾斜しており、このゆるい傾斜地を整地して建物、溝等を造営している。検出した遺構には、6世紀以前（古墳時代）、7世紀代、8世紀代、それ以降の時代のものがあり、以下順次遺構の概略を述べる。



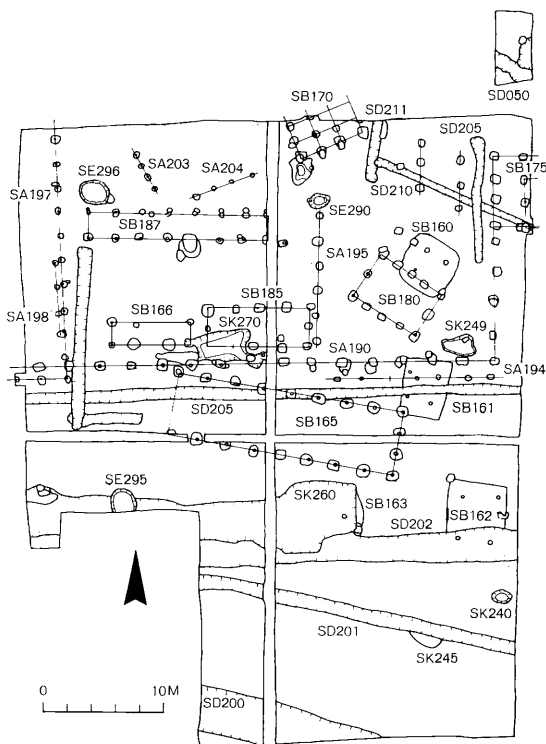
第3図 小墾田宮推定地の遺構状況

古墳時代の遺構 堅穴住居4、土壙2、井戸1がある。堅穴住居は平面隅丸方形のもの S B160、長方形のもの S B161・162があり南北に並ぶ。いずれも径4～5m大で4個の柱穴をもつ。この他、S B162の西に大半を破壊され、規模不明の堅穴 S B163がある。このうち、S B162・163にはカマドが付設されていた。これらの堅穴住居の年代には5世紀末（S B160）から6世紀前半（S B

162) までの幅がある。その他、同時代の遺構として井戸 S E 290, 土塋 S K 240・245がある。

7世紀代の遺構 掘立柱建物 4, 柵 3, 溝 7, 土塋 2 などがある。S B 165は発掘区中央部に位置する 8 × 3 間の東西棟建物で, 建物の軸線方向が真東西に対し西で 10° 北に振れている。7世紀代の建物及び柵は, すべてこれより北に位置している。S B 170は, 北半が発掘区域外までのび全容は不明だが 3 × 2 間以上の総柱の建物と考えられ, 真東西に対して西で 20° 南へふれている。S B 180は, S B 165と S B 170の中間東寄りにある。4 × 2 間の東西棟で, 真東西に対して西で 33° 北へふれている。S B 187は 7 × 1 間の東西棟で, 後に北側柱の建てかえを行っている。S B 187の東には南北柵 S A 195がある。方向は真北に対して北で 1° 東に振れており S B 187のそれに一致する。発掘区の西端近くには南北柵 S A 197 (11間分) があり, 南端で西折し S A 198 (2間分) となる。いずれもさらに発掘区外へつづく。S A 197は真北に対し北で 3° 西に振れている。S D 050は, 第 1 次調査で検出した石組溝の北西延長部にあたる。この溝は, 7世紀前半の整地層を掘り込んで作られている。北岸は径 0.2~0.5m の河原石を 2 段に積んで側壁としている。南岸は土塋によって破壊されていた。今回の調査において, 第 1 次調査で検出した遺構と明らかな関係を示すものはこれだけである。

発掘区南半には 3 条の東西溝 S D 200・201・202がある。S D 200は, 南東から北西に向けて流れる幅 3.8m の素掘りの大溝で, 長さ 16m にわたって検出した。S D 200の北にはこれとほぼ平行する素掘りの溝 S D 201がある。長さ 27m 以上, 幅 1.1m, 深さ 0.5m を測る。これらは真東西に対して西で北に 12.5° の振れをもっている。S D 202は, 201のすぐ北を西流する素掘りの浅い溝 (0.15m) で, 長さ 26m 以上幅 2m がある。この他, 発掘区北端近くに S D 206・210・211がある。これらの遺構には, 7世紀前半から後半までの年代幅があり, 遺構の軸線方向にも真北に近い方向をとる群と, 10~30° の振れをもつ一群があって, おそらく時期差によるものと考えられるが, 細かい時期区分は今後の検討にまわたい。



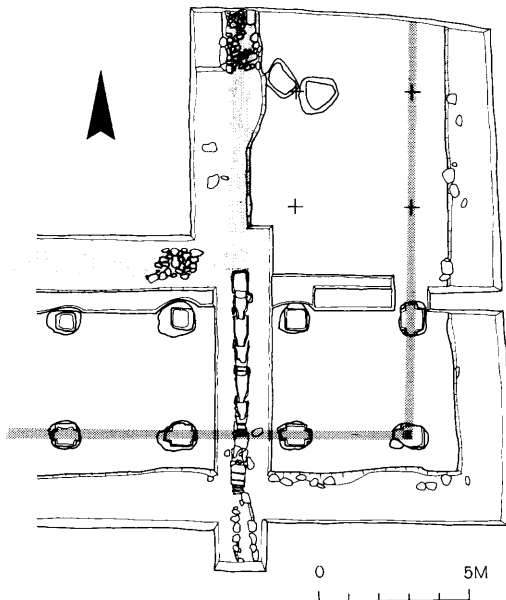
第 4 図 小墾田宮推定地遺構配置図 (第 2 次)

8世紀代の遺構 掘立柱建物

3, 柵2, 溝1, 土壇2, 井戸1などがある。これらの遺構は、8世紀初頭の遺物を含む整地層の上で検出したものである。7世紀代の遺構と同様、発掘区南半に東西溝を、北半に建物群を配している。発掘区中央北寄りにS B185(4×2間), 186(3×1間)の2棟の東西棟が東西に並んでいる。いずれも真東西に対して西で1°南に振れており、この方向は以下の建物、柵にも共通する。これらの建物のすぐ南を東西柵SA190(15間分)がはしっている。これは、8世紀に造営されたこの地域の建物群の南を限る施設であろう。この柵は、東端で北折しSA191(4間)となる。SA191の北には、これと西妻柱列の柱筋を揃えた3×2間以上の東西棟SB175がある。SA190の南2.4mの位置には、これに平行してSD205がある。幅約1m、深さ0.1~0.8mあり、41mにわたって検出した。SK260は東西に長い溝状の土壇で、西は調査区外にのびるが、長さ27m以上、幅3~6m、深さ0.1~0.4mである。溝の東端で8世紀前半の土器を多量に検出した。SK270は、SB185・186, SA190と重複した土壇であり、これらの建物より新しい。

これらの遺構は出土遺物や相互の切合い関係から、概ね8世紀前半におかれよう。

以上、発掘調査の概略を記したが、各期の遺構の配置、方位をみると、8世紀代の遺構は、真北に近い方向をとり、また、遺構の配置にもある程度の規則性が認められるのに対し、7世紀代の遺構には、真北に近い方向をとるもの他、10~30°と各々全く異なる方向をとるものも多く、配置の状態も不規則である。ただ、これら方位の振れの大きい遺構群中に、この地域の古い地割りと関連をもつものがあることも考えられ、今後の問題を残している。さらに、今回検出した建物遺構は、7・8世紀代ともに発掘区北半に限られており、南半には存在してない。



第5図 川原寺跡回廊遺構図

このような遺構のあり方は、発掘区の南側を通る県道付近が「山田道」と推定されていることを想起すると、「山田道」の存在と何らかの関係があるのかも知れない。しかし、7世紀代には、県道下に入り込む大溝SD200などが存在しており「山田道」の位置や造営時期等については、今後さらに検討する必要がある。

川原寺跡の調査 川原寺については、すでに昭和32・33年度の当研究所の発掘調査によって、伽藍主要部が明らかになっている。今回、川原寺整備のための資料を得ることをかねて、東大門・東南院・回廊について発掘調査を行った。

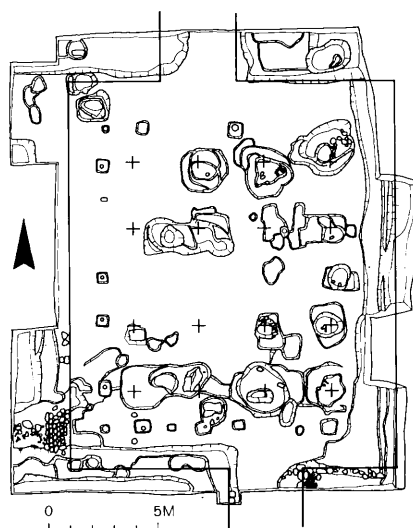
1 東大門および築地 東大門は塔心礎

の東約60mでやや北寄りのところに、その位置が推定されていた。今回の調査によって、この位置で東大門を確認し、さらに、これに取付く築地を検出した。門の基壇上面はかなり削平され、基底部分が残るのみであった。また、基壇東端は後世の破壊を受けている。しかし、礎石抜き取り穴や、雨落溝の存在によって、基壇の規模・門の規模を知ることができた。基壇化粧は大半が失われていたが、基壇南面東寄りに径0.5m前後の河原石が東西約3mにわたって並んでおり、地覆として、本来基壇全周をめぐるかと思われる。また西南隅では、基壇をとりまく玉石敷の雨落溝を検出した。これから考えて、門基壇の規模は東西15m・南北17.7mと推定される。門の建物は礎石据付掘りかた、礎石抜き取り穴の状況から、桁行3間・梁行3間に復原できる。柱間は桁行中央間約4.5m(15尺)・両脇間3m(10尺)、梁行約3m(10尺)等間である。東大門は3間×3間の平面で、規模は南大門・中門よりも大きい建物であったという新しい知見が得られた。これは、川原寺の東に当時の幹線道路が通っていたことによるものと想定される。

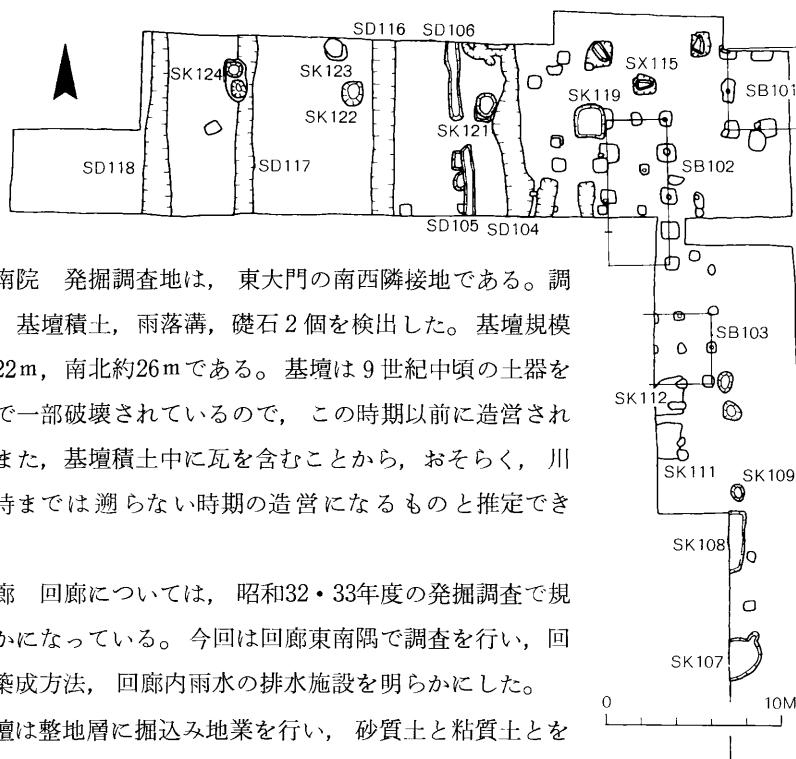
門基壇は旧地表面より約1mの深さに掘込地業を行い、黄色粘土と灰緑色粘土とを交互に突固めた版築から成っている。この版築の範囲は、基壇の西と南では基壇端から外側へ3m以上の広さに及んでいる。しかし北辺部では、基壇端から0.5~1mの範囲は黄褐色粘土を積上げて基壇土としているのみで版築は認められない。このことは、東大門造営について、建物造営の段階になって当初計画を変更し、北へ移動して造営したか、あるいは、版築による基壇築成が計画より南にずれたことに起因するものと思われる。

門の両脇には築地が取付く。築地本体は削平されていたが、南北の取付部では築地の基底部分が門基壇の地業上に乗っていることを確認した。築地基底部分は、門基壇のような整った版築ではなく、粘質土を数層積み重ねたものである。南の築地は門の東第2柱列に取付き、北の築地は門の東第3柱列の心に合っている。すなわち、東面築地の取付き位置が門の南北で約3mのずれをもっていることが明らかになった。

東大門には南北の築地のほかに、門西面には南北の両端に東西方向の2条の築地が取付いていた。この築地の端は、門基壇端に、築地心は門の妻柱列に揃えている。築地の築成土中には瓦が含まれていて、その築造が川原寺創建時より時期が下る可能性を示している。2条の築地のうち、南の築地は東南院を画する性格と考えられ、北の築地は北部の一面を区画する施設であろう。



第6図 川原寺跡東門遺構図



第7図 大官大寺跡遺構図

2 東南院 発掘調査地は、東大門の南西隣接地である。調査の結果、基壇積土、雨落溝、礎石2個を検出した。基壇規模は東西約22m、南北約26mである。基壇は9世紀中頃の土器を含む土壌で一部破壊されているので、この時期以前に造営されたこと、また、基壇積土中に瓦を含むことから、おそらく、川原寺創建時までは遡らない時期の造営になるものと推定できる。

3 回廊 回廊については、昭和32・33年度の発掘調査で規模が明らかになっている。今回は回廊東南隅で調査を行い、回廊基壇の築成方法、回廊内雨水の排水施設を明らかにした。

回廊基壇は整地層に掘込み地業を行い、砂質土と粘質土とを交互に突固めた版築から成っている。回廊内の雨水を回廊外に排水する施設、暗渠と石組溝を検出した。南面回廊基壇を横断する部分は暗渠、その南に石組溝が続く。暗渠は基壇築成に伴って取付けたもので、7本の土管を連結し、全長6.7mである。土管は瓦質の円筒管で、他に例をみないものである。この土管の破片は、東大門周囲の瓦溜りからも出土していて、川原寺の各所で使われていたと考えられる。ただし、この土管は、形態上土管中に土砂が充満しやすい点、土管の連結部に間隙の大きい点、使用に際して外面の凸帯を割って据えている点などから考えると、本来暗渠のために製作されたのではなく、他の用途のものを転用したと考えられる。

なお、調査地全域から多量の瓦類が出土した。軒瓦については、いずれも、前回調査時に出土した軒瓦と同型式のものである。この他、若干の工具類、塼仏が出土している。

大官大寺跡の調査 発掘調査地は、大官大寺講堂跡と推定されている土壇の北西約150mの地域である。ここは、大官大寺の寺地内であることが推定され、また、飛鳥岡本宮の推定地でもある。この地域に畜舎が新築されることになったため事前に発掘調査を実施した。

検出した遺構は、掘立柱建物3、土壇9、溝4などである。これらの遺構は、出土遺物や重複関係からⅠ、Ⅱ、Ⅲ期の三時期に区分できる。

Ⅰ期（7世紀後半） この時期の遺構は、建物SB101、SB102・SB103、溝SD104・SD105がある。SB101は、梁行2間、桁行2間以上の東西棟である。柱間は梁行2.1m等間、桁行

2.3mである。S B102は、梁行2間、桁行4間の南北棟である。梁行は1.6m等間、桁行は北から1.8m・2.6m・1.8m・1.8mである。S B103は、梁行2間、桁行2間以上の総柱建物である。柱間は約1.7m等間である。S B102・S B103は、建物方位が同じであること、柱穴がともに浅いことなどの共通性を持ち、同時期の建物と考えられる。

S D104は、北流する南北溝で、発掘区北辺に支流がある。溝幅は1.2m～1.5m、深さ0.7～0.8mである。S D105、S D106はともに溝幅0.5～0.6m・深さ0.1m足らずの浅い溝で埋土も非常に似ており遺物を含まない。

Ⅱ期(7世紀末～8世紀初期) 土壌SK107～109, SK111～114である。土壌はすべて浅く、須恵器・土師器・瓦を含んでいる。

S X115は、花崗岩の大石3個からなる。この石は、方形の穴に落とし込まれた状態で検出された。現状では石の上面が水平でなく、形態上も礎石とするには不整形である。この遺構の性格はよくわからない。

Ⅲ期(中世) 土壌SK119・121～124, 溝S D116～118がある。

遺物 S B101・102・103の柱穴からは、それぞれ少量の土器が出土し、また、S D104埋土からは、相当量の土器が出土しており、遺構の年代を知る手がかりが得られた。瓦類は、調査地区全域から多量に出土したが小破片で、磨滅が著しいのが特徴である。軒瓦も磨滅が著しく文様も明瞭でないの多いが、いわゆる大官大寺式瓦であり、他の型式の軒瓦はない。

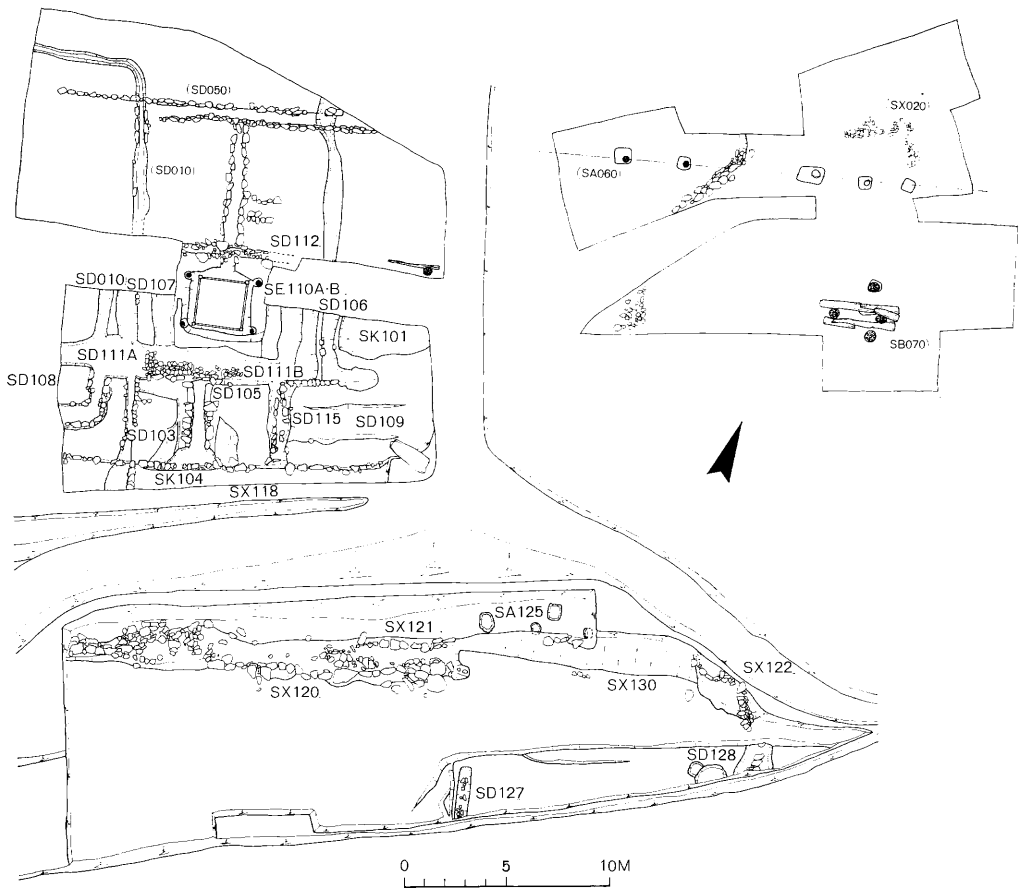
調査の結果、検出した遺構は、7世紀後半～8世紀初期と考えられ、大官大寺に関連する遺構と考えられる。また、7～8世紀代の遺構がS D105・106以東にのみ存在し、それ以西には認められないことを確認した。このことは、大官大寺の西限を知る上でひとつの重要な手がかりとなろう。

坂田寺跡の第2次調査 調査は、建設省が実施する祝戸国営公園建設に伴う事前調査として前回調査区域(年報73参照)の南に接する地区で行った。調査区域は、道路をはさんで約2.5mの高低差があり、検出した遺構の状況が異なるので、北・南の二地区に分けて調査の概略を述べる。

北地区 調査の結果、井戸1, 溝12, 土壌3などの遺構を検出した。これらの遺構は大別して四期に分けられる。

I期(7世紀) この時期には、石組溝S D105があり、その南端を土壌SK104が破壊している。S D105の西に南北溝S D103が併行する。さらに7世紀前半と考えられるSK101がある。

Ⅱ期(8世紀前半) この時期には井戸S E110Aと、その南に石敷溝S D111Aがある。井戸本体は破壊されているが、井戸の掘形の中に三本の柱材、井戸側板1枚が投入されていた。柱材は、角柱で削り直しや柄穴の状況から、転用材であるが、井戸屋形に関連した柱材と考えられ井戸の廃絶とともに捨てたものであろう。第一次調査の石組南北溝S D051は、この井戸の排水施設である。またS D111Aは、一部分が残存するのみであるが、井戸周囲の排水施設であらう。



第8図 坂田寺跡遺構図(第1, 2次)

Ⅲ期(8世紀後半～10世紀) さらに、3小期に区分できる。Ⅲ-1期には基壇化粧石を転用した凝灰岩地覆石を側壁とする溝SD108がある。Ⅲ-2期には、井戸SE110Aに重複してSE110Bをつくる。SE110Bは井戸枠の下部五段が残っていた。井戸の四隅には柱根が残っており、井戸屋形があったことを示す。Ⅲ-2期には、この井戸を取り囲む溝SD106・107、111Bがある。また、第一次調査で、検出した溝SD010の南延長部を検出した。Ⅲ-3期には、石組溝SD115、SD116、SD013がある。

Ⅳ期(11世紀以降) 前述した遺構がすべて廃絶した後に、東西の石垣SX118を築き、その北側一帯には瓦片を敷いている。

南地区 調査の結果、石垣、斜道、柱穴、列等が検出された。

Ⅰ期(7世紀) 明確な遺構の存在は確認していないが、厚い瓦堆積層が広がっており、南側の未調査地域に何らかの建築遺構が存在することを想定させる。

Ⅱ期(8世紀) この一帯を整地して東西方向の段をつけ石垣SX120を築く。SX120は、調査

飛鳥藤原宮跡の発掘調査

区域の東端で南へ曲り、石垣SX122となる。SX122の西で、幅約12mの斜道SX130があり南北を結ぶ通路となっていたらしい。

Ⅲ期(9世紀以降) Ⅱ期の石垣、斜道に補修が認められる。

この他に、時期を確定し得ない柱穴列SA125などがある。

出土遺物 瓦類には、大量の丸・平瓦と、若干の軒瓦・極先瓦・鴟尾がある。軒平瓦の中には、手彫り忍冬唐草文の完形品を含んでいる。土器には、土師器・須恵器の他、黒色土器・緑釉・三彩・灰釉があり、墨書土器として、「坂田寺」「厨」「南客^上」等がある。

紀寺跡の調査 県営明日香運動公園の建設予定に伴い、紀寺推定地を、奈良県教育委員会と合同で発掘調査した。発掘調査の結果、金堂・講堂・中門・南大門・回廊など伽藍主要部を明らかにした。なお、塔跡は確認できず、紀寺の伽藍配置を考える上で問題を提起した。また南大門に取付く掘立柱列を門両脇で検出した。東の掘立柱列は、門の中心から東約120mの地点でも検出され、ここで北に折れる。ここが寺域の東南隅と考えられるが、この南北柵は藤原京条坊計画線にほぼ一致しており、紀寺及び藤原京の造営について重要な資料を提供した。

山田道推定地の調査 調査地は桜井市山田字山崎で東大谷日女神社西側、県道桜井一明日香線の南台地に位置する。調査の結果、調査地の北部で幅3m、深さ1mの東西溝1条を20mにわたって検出したにとどまった。溝埋土より7世紀後半の土器を多数検出した。溝の性格は、山田道南側溝の可能性もある。

藤原京南西地区の調査 調査地は近鉄橿原神宮駅前の東方200m、駅東口より明日香村豊浦に通ずる県道の北側で、推定藤原京の西南隅にあたる。発掘調査の結果は旧水田面下約1mで南より北へ流れる旧河道を確認した。この旧河道の堆積層上面では小溝2条と土壌2を検出したが、藤原京にともなう遺構は確認できなかった。遺物は旧河道堆積層から弥生式土器、土師器須恵器、施釉陶器、瓦器、土馬、土錘、瓦、隆平永宝、富寿神宝などが出土した。また画像をえがいた土師器(平安末鎌倉)6点が注目される。

(甲斐忠彦 上野邦一)